
とある魔術の血継限界《ブラッディ・リミット》

シラッチ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある魔術の血継限界
ブラッド・リミッター

【Nコード】

N3901X

【作者名】

シラッチ

【あらすじ】

とある少年は一度死んだ。だが、少年は死後の世界で望んだ通り
うちはサスケとして現世に甦る。 だが、転生された世
界は少年の望む世界では無かった。 上条勢力ととうち
はサスケが交差する時物語は始まる!?

事故死しました。（前書き）

転生者初挑戦ですので生暖かい目で見てください；

事故死しました。

「ん……」

気が付くと真つ白な空間に俺は立っていた。

……あ？ 何で俺は立っていられてんだ！？ 確か、俺は車線を

飛び出したトラックに跳ねられたっつーか押し潰されたというか。

一体どうなっている？

「今の状況が分かってないみたいな顔をしていますね貴方。……まあ、無理もない」

突然若い男の声が俺の耳に入ってきた。スピーカーでも耳元で囁かれるのはまた違う脳に直接打ち込まれるみたいな奇妙な聞こえかたがする。

「誰だよお前」

「私の名前ですかー、メフィストとでも名乗っておきましょうか？」

「メフィスト？ 悪魔みたいな名前だな。で、ここはどこだ？」

「どこか……かは明確には言えませんがただ一つ言えるのは」

「『貴方は死にました』か？」

「先に言わないでくださいよ面白くない」

「やっぱりか。おかしいと思っただがここは死後の世界か。あーあ、結構充実してた人生だったのになあ。」

「おやあ珍しい。あまり驚かないんですね貴方」

「大体察してたからな。くっそーつまりまらない死に方したな俺」

「同感ですね」

「イラッ。」

何かさっきから馴れ馴れしい上に無駄にイケメンボイスだからムカつくわー。ムカついてきた。

「はいはいそうだね。分かったから俺を三途の川なりなんなりに連れていってくれないかなあ」

「本来なら貴方の行き先はそこでしょうが」

「地獄か？ あれ、地獄も三途の川渡るんだっけ」

「いいえ。現世に行ってもらいます」

「……は？」

おい今コイツ何と言った……？

「生き返らせてくれんのか！？」

「はい。ただし条件付き克つ貴方の住んでた世界とは違う世界ですが」

おう……条件つけてくるところが凄く悪魔っぽい。

「まず条件はただ一つ『その世界で貴方が私を楽しませる事』です」

「お、おう。出来なかつたらどうなんの？」

「それは後で考えておきます」

「ちっ。なんか怖いな。んで、俺はどんな世界に行けばいいんだ」

「それは貴方が決めていいですよ。どんな世界にでも飛ばしてあげましょう」

なん……だと……！？

まるで神様みたいな奴だな。しかしどんな世界でも良いと言われると逆に困るよな。

んー、戦国時代に行くとか？ いや、また死にそうだな。バブル時代の日本……いやいや！ どんな世界でも行けるんだっけか。という事は……！？

「それって漫画やアニメやゲームの世界にも行けたりするの？」

「楽勝ですね。因みに好きなキャラにも転生する事も出来ますが、どうします？」

「NARUTOの世界にうちはサスケとして転生させてくれ」

「即決ですか」

「おう。まともに読んでる漫画それくらいだしサスケは器も容姿も

良いからな」

「……大蛇丸みたいな事を言いますね」

「お？ NARUTO好きなの？」

「好きというか転生させる世界の事はそりゃ知ってるでしょう」

何だその理屈。

「さてと……では早速飛ばしますよ」

なんか展開が急すぎるような気がしなくもないが。

サスケとしてNARUTOの世界歩けるなんてワクワクしか沸いてこないな。

あれ？ 時系列とかどうなるんだろ第一部か二部か……まさか生まれ

禁書の世界じゃねーか

「……………」
気が付くと俺は地面に仰向けになっていた。

そう、俺は一度死んで『うちはサスケ』として転生したのだ。
とりあえず起き上がって今自分が居る場所を確認しておくか。

「公園か？ ……ここ」
周りに街路樹が埋めてあったり砂場や噴水があったり。その砂場で小さな子供達が砂遊びをしてたりと。何か現代チックな公園だな。そして公園の入り口から見える道路では車が行き来しているのが確認できる。

ちよつと待て自動車だと？

NARUTOの世界にカラクリはあるけど自動車なんて物は無かったよな！？

ははは！ 何だ全部夢だったのか。取り敢えず顔でも洗うか！。

「どう見てもサスケエ……………」

トイレの鏡を見て俺は言葉を無くした。鏡に映っているのはどう見てもNARUTOの『うちはサスケ』なのだ。顔付きや背丈からして第二部のサスケという所か。

だが！ 着ている服は何故か半袖の学校の制服！！

何だこれはどういう事だ……………！？ 何これサスケとして転生は出来たけど飛ばす世界を間違えたとかか！？

そしてズボンのポケットから来る感じた事のある振動。ポケット

に手を突っ込んで俺は中にある物を引っ張り出す。

「チツ、やはり携帯電話か」

もう絶対にここはNARUTOの世界じゃない。半分諦めが付いてたがこれで確信した。

取り敢えず通話ボタンを押して耳に携帯を当ててみる。

「ハロー！ メフィストです。調子はどうですか！？」

出たー。糞野郎のお出ました。

「ようクソヤロー。率直に聞くがお前俺をNARUTOじゃない別の世界に飛ばしただろ」

「そうなんですよ。私とした事が珍しく間違えてしまいましたね。

又ハハハハ！」

「故意だろ？」

「そのような事があるうはずがございません」

「もういい。さっさと俺をもう一度NARUTOの世界へ飛ばせ今度は間違えないようにな」

「それは無理です。私の力では貴方を飛ばせるのは一度きりです」

「いや何堂々と『一度きり』ですだよクソヤロー。責任取って死ぬ気でもう一度試す甲斐性も無いのかテメー」

「口に気を付けた方がいいですよ？。そもそも貴方は私が貴方の魂をキヤッチしなければそのまま地獄行きだったのかもしれないのですよ？」

貴方はあくまでも私に生かしてもらっている事をお忘れなく」

「ぐっ……………」

クソツタレ。そういや俺は元々死んでる筈の所をコイツに救ってもらったみたいなものだったな。

取り敢えずうちはサスケとして転生は成功したんだし、ここは一先ず黙っておくのが良さげだな。

「……………チツ」

「ふむ。分かったようなら宜しい」

「じゃあもう良いか？ 切るぞ」

『おや貴方。自分がどの世界に飛ばされたか知りたくないのですか？』

「一応聞いておいてやろうか？」

『『とある魔術の禁書目録』というライトノベルの世界です』

とある魔術の禁書目録か。名前も知ってるしアニメも観た事あるがライトノベルの原作は読んでないから詳しい設定は知らないんだよな。

とりあえずは……家でゆっくりどうやってメフィストをこの世界で楽しませるか考えるか。ん？

「そっいえば俺の家はどこだ？」

ヤバイな。色々と肝心な事を奴に聞き忘れていたぜ。

「着信履歴……無いな。どうやったんだアイツ。電話帳……一人も登録無し、か」

いきなり路頭に迷いかけるとはな。いや、今着ている制服からしてどこかの学生なのは間違いない筈だ。

思いきって交番に行くか。いや、とある魔術の禁書目録世界には警察が居ない世界観で変わりに

「その殿方？ そろそろ完全下校時刻ですのに何を一人で突っ立っているんですの？」

「あ？」

後ろを振り向くと茶髪をツインテールにまとめた女が居た。制服着てるし見たところ中学生くらいか？ それにしても声が少しババアっぽいな。

というかコイツ、どこかで見たような。

「下校時刻？ お前こそ何をやってるんだ」

「私は風紀委員としてパトロールをしているんですの」
ジャッジメント

ジャッジメント……どこかで聞いたような。確か警察の代わりがジャッジメントやらだったか？ あともう一つ何かあったような気がするが今はどうでもいいか。

「完全下校時刻とか言われても自分の家が分からないからな。どうしようもないぜ」

「あなた、最近ここに来られた方だとか。それとも記憶喪失ですの？」

「どっちも合ってるっちゃ合ってるな。」

「フン、どちらかというと前者だな。今日ここに来た」

「記憶喪失も混じっているって事ですの？ とにかく、困りましたわね」

顎に手を当ててうーむという感じで目の前の女はジェスチャーを取り始めた。

そして約十秒後。

「まだ初春がこの辺りに居たはず。ちょっとあなたそこで待っていてくださいな」 そう言つと茶髪ツインテールの女の姿が虚空に消えた。レポートというやつだろうか。

そして更に約十秒後。茶髪ツインテールが頭に花飾りを乗せた女を連れてきた。コイツが初春という奴なのだろう。

「お待たせしましたわ。あなた、お名前は？」

「うちはサスケだ」

「あら、少し変わった名字ですね。初春、検索を」

「は、はい」

初春が背中のリュックサックからノートパソコンを取り出す。名前を検索するだけで住所とか分かるものなのか？

「悪いな」

「いえいえこれも風紀委員のお仕事の一環ですので。今、書庫にアバンク

クセスをかけていますのでもう少しお待ちくださいな」

バンクとやらはプライバシーも糞も無いサイトなのだろうか。

「因みに書庫には風紀委員権限でアクセスしていますの。悪用しようとしても無駄ですわよ?」

成る程。ジャッジメントとやらの特別なデータベースってどこか。

「白井さんありました!」

「うちはサスケ……これで間違いないですわね」

「目の前で自分の事延々と検索されても良い気しないな。住所は分かっただのか?」

「ええ。もし良かったらあなたの携帯に住所だけなら地図アプリ付きでデータを転送で出来ますわよ?」

「ああ、頼む」

取り敢えず住む場所は確保出来たようだな。

というか家がある設定で転生出来て良かったぜ。

てつきりオンボロアパートを想像したんだがわりとマシなんだな。というか俺が生前に住んでた住まいよりも立派なんじゃねえかこれ。ったく最近の学生は贅沢だな。

「あつた、ここだ。それにしても表札がひらがなで『うちは』って何かカツコ悪いな。今度うちのはの紋章にでも変えてもらうか」

何気無く隣の部屋の表札を見ると『上条』と書いてあつた。普通の名字だな。

「そついやこの世界の主人公の名前は上条だったな」

主人公の上条かは知らないが確かアニメで見た限りとある魔術の禁書目録の主人公は学生寮に住んでいた筈だ。主人公の上条である可能性はかなり高いだろう。

「フン、結構ついてるかもな俺は」

安易な考えかもしれないが。

主人公とお隣「主人公だからイベント多い」あえて俺もそのイベントに巻き込まれてみる「メフィストを楽しませる。

単純にこう考えられる。確証はあんまりないが。

「取り敢えずはこの中で一人作戦会議だな」

俺はドアノブに手を掛けた。

「あ……鍵何処だよ」

禁書の世界じゃねーか（後書き）

色々消化不良があります。が仕様です。

次話が行間で消化します。

因みに主人公は性格も口調もサスケっぽくなっていきます。

サスケの髪型はイタチ倒した後ので解釈してください。

閲覧、お気に入りありがとうございます！

写輪眼を用いた戦闘……つまり写輪眼を使いこなす練習といったところか（前書

は？　と思う人もいるかもしれませんが次話で説明をば

写輪眼を用いた戦闘……つまり写輪眼を使いこなす練習といったところか

「そろそろ時間だな」

俺は黒いコートを羽織い、部屋の隅に立て掛けてあった『草薙の剣』を背中に挿す。

両手首にはあまり必要になるとは思えないが『雷光剣化』の印を描いた布を巻いておいた。

「さて、俺の術を試しに行くか」

午後八時を少し過ぎたところだろうか。

交差点に女性の怒号　それも『聖人』である神裂^{かんざき}火織^{かおり}の声がこだましていた。

だが、その声に異変を感じる者はいない。『人払いの刻印^{ルーン}』によってここは神裂と地面に転がっている上条当麻以外には誰も存在しない空間になっているからである。

神裂は七天七刀の鞘を振り上げながら咆哮する。

「私達だって頑張ったよ、頑張ったんですよ！」

彼女が鞘を降り下ろす度に何かが潰れたり、砕けるような音が響く。

「春を過^くじ夏を過^く……ッ!？」

神裂はその場から慌てて飛び退く。

突然、直径一メートル程の火球が彼女目掛けて飛んできたからである。

「ふっ！」

火球は神裂を追尾したが、それは振るわれた彼女の腕によって搔

き消されてしまった。

「よお。そんなただの高校生をいたぶるのは楽しいのか？」

「何者です……？」

暗がりにも二つの赤い光が浮かび上がった。だが、一寸後に神裂はそれらが赤い目だという事に気付く。

赤い瞳に浮かぶ巴模様。人間の持つ目では無いように見える。そこまで観察した神裂は背筋に冷たい感覚が走るのを感じた。

第六感である瞳に目を合わせるのは危険だと察知した神裂は思わず目を逸らす。

「どうやってここに入ってきたのですか？ 人払いの刻印は発動してるはず……」

「オレの写輪眼はチャクラ……いや、ここでは魔力か。それを色で見分ける」

「シャリンガン……？」

「今から戦う相手にペラペラと手の内を話すとも思ってるのか」

「ふふ、確かに同感ですね。ですが、貴方は何故戦うのですか？

この少年の知り合いなのですか？」

「戦闘前にごちゃごちゃとうるさい女だ」

「ッ！！」

この一瞬の間にうちはサスケは神裂の懐に潜り込んでいた。

「中々のスピードですね」

そのまま草薙の剣で神裂の胴を切り裂こうとしたサスケだったが、刀を握った手は神裂に押さえ付けられていた。

振りほどこうとしたサスケだが、如何せん相手の力が強すぎる。

（オレの踏み込みを中々扱いとはな。やはり聖人という者は化け物だな）

「千鳥なが……」

「させませんよ」

自分も巻き込む覚悟で術を使おうとしたサスケだったが先に神裂の蹴りが炸裂した。

能力も魔力も使わないただの蹴り。だが、聖人の蹴りは人間の蹴りとはわけが違う。サスケは十メートル程の距離をノーバウンドで吹き飛ばされる。

「くっ」

何とか無傷で地面に着地したサスケだったが、刀を手放してしまっている事に気付く。そして神裂が草薙の剣に手を触れようとしているという事態にも。

「気安く俺の刀に触れるな」

そういいながらサスケは両手首に描いてある印に両手を触れる。

ボン、というガスが破裂するような音と共に彼の手に手裏剣が出現する。サスケは雷性質のチャクラを流し込んで殺傷能力を上げた手裏剣を次々と神裂に投げ付ける。

「何も無い所から武器を!？」

驚きながらも神裂は五メートルぐらい跳躍してそれらを避ける。

その隙にサスケは神速で走りながら落ちていた草薙の剣を拾い上げ、地面に着地した神裂と対峙する。

「貴方……学園都市の能力者では無いようですね」

「それに気付いたところでどうする」

「そうですね……『七閃』^{ななせん}」

抜刀術『七閃』がサスケに襲い掛かる。アスファルトをいとも簡単に切断し、めくり上げる威力の斬撃がサスケに向かう。

それに対してサスケは刀を振り上げただけだった。その行動をしただけで彼は無傷でその場に佇んでいた。

「ワイヤーか、そんな物が通用するかよ」

「……『七閃』をこつもあつさりと防がれるとは。その目のおかげですか？」

「さつきからくだらねー質問ばかりだな。誘導尋問のつもりか」

「それは失礼しました。しかし、貴方は私達と似た匂いがしますね。」

貴方のような見た事無い魔術を持っている魔術師は協会に報告するに限る」

「フン、勝手にしろ。ただ、テメエが生きて帰ってこられたらの話だがな」

神裂の言葉を笑い飛ばしながらサスケは高速で印を結ぶ。そして大きく息を吸い込む。

「火遁・豪火球の術！！」

轟！！ と直径五メートル程の丸い火炎がサスケの口から放出された。

神裂は迷わず横へ跳ねる。そこへ手裏剣が四枚投げ込まれたがそれを彼女は余裕をもって躲す。

「死ね」

しかしそこへ更に草薙の剣に千鳥を用いた千鳥刀が振るわれる。鋼をも容易に引き裂くこれを食らえば聖人といえどただでは済まない。

「死ぬわけにはいきません」

甲高い金属音が夜の交差点に鳴り響く。白く輝く七天七刀と千鳥の雷性質のチャクラによつて蒼白く輝く草薙の剣がつばぜり合う。

「千鳥刀で断ち切れないとはな。何らかの魔力を流し込んでるのか」「自分の手の内を明かすと思うか？ …… 貴方が言った言葉ですよ」

「誰もテメエの手の内なんか聞いてねえよ。ただの独り言だ」

余っている左手で神裂を殴りつけるが、神裂はこれを顔を少し横に傾けて避け、更にサスケの手を引き込む。そのままバランスを崩したサスケの顔に膝蹴りを打ち込む。

顎が碎ける嫌な音が鳴る。神裂も確かな手心えを感じていた。だが。

「分身大爆発の術」

その瞬間、神裂の目で捉えていたサスケの体が大爆発を起こした。半径十メートル範囲の全ての物が風ぎ払われていく。

「フン、今のを食らって五体満足とは凄いな」

爆心地で倒れている神裂を見下ろしながらサスケは口角を少し吊り上げる。

「ぐっ……うっ……」

「意識まであるとはな。随分と頑丈な体だな」

今にも刀を杖にして立ち上がるうとしている神裂を見たサスケは優位に立っているにも関わらず眉を潜める。何かが、来る。

「少し、油断しすぎました……ね。本来は名乗りたく無かったのですが。このダメージではもはや一瞬で片をつけるしか勝ち目は無い……」

完全に二本の足で立ち上がった神裂は一旦刀を鞘に戻し居合いの構えを取る。

「Salveree000《救われぬ者に救いの手を》！」

「何だ……？ コイツの……！？」

写輪眼を活性化させ神裂を睨む。負けじと睨み返して来る神裂の瞳にゾワゾワとした感覚が体を巡った。

「いきますよ」

真っ直ぐに此方に踏み込んで刀を振るう神裂。

もはや刀の打ち合いなどという現象は起きなかった。数秒の内にサスケの体のあちこちに切り傷が付いていく。

写輪眼をもってしても神裂を全く追えないのだ。剣筋がどうのこうの話では無く、単純なスピードである。相手の刀を振るうスピードが早すぎるのだ。

あまりの猛攻にサスケがふらついた間に神裂は刀を鞘に戻す。

「これで終わりです……『唯閃』」

目を見開いたサスケが千鳥刀で防御しようとしたが無駄だった。単純な一閃。それは草薙の剣を真つ二つに折り、サスケの体を切り裂く。

「安心してください。死なないように手加減はしてあります」

後方のサスケの鮮血を浴びながら神裂は目を瞑り、ガツクリと膝を着いた。あの爆発を食らった上に唯閃を使用したのだ。体にかかり負担がかかるのは当たり前だと神裂は少し自嘲気味に少し微笑む。「危なかったですが、何とか……」

「勝てたと思っただか？」

後ろから聞こえたサスケの声に神裂は振り向こうとしたが突如、彼女に激痛が走った。

「……………？」

何故だかは知らないが自分の右脇腹がパツクリ切り裂かれて、そこから大量の鮮血が飛び散っているのに神裂は気付く。

「……………？ ……え？」

身体中の力が抜け、地面にうつ伏せに倒れ伏す神裂。訳がわからないまま彼女顔を横にして何とかサスケの姿を視界に収めた。

唯閃を食らったはずなのに大きな傷は付いていないうちはサスケ。それを確認した彼女の意識はそのままブラックアウトしてしまった。「俺の瞳術だ。最初は利口に俺から目を背けてたが、唯閃とやらを使う瞬間が駄目だったな。」

本来なら本気になったアンタに試したい事は色々あったが……アンタ相手じゃ『あれ』を使わざるを得なかったかもしれねえ……っってもう聞こえてないか」

写輪眼を用いた戦闘……つまり写輪眼を使いこなす練習といったところか（後書

神裂さんはサスケの能力知らないからかなり不利でしたねw

上条さんスルーしてますが後でちゃんと絡ませますよ

お気に入り、閲覧感謝です

ステイルの意地

勝った。この世界でもかなり強い部類に入る神裂に勝った。

最初から相手が本気を出していたらどうなっていたかは正直分からないが。とにかく勝ちには変わりない、いい戦闘経験になった。

さて、後は……

「隠れていないで出てこい」

コソコソと控えている奴をどうするかだな。

「うん？ 何か言ったのかな？ あいにく僕は耳が悪くてね。もっとこちらに近付いて発言してもらえたらありがたいのだが」

「わざわざお前のブービートラップに引っ掛かれとでも？」

オレの写輪眼はチャクラや魔力を色で見分ける事が出来る。

本人としては目には見えないステルストラップを地面に仕掛けたつもりだろうがな。この眼があるとそれも間抜けな行為にしか見えない。

「さつさと出てこい。姿を消す魔術も使っているみたいだがこの眼の前では無意味だぜ」

「……チツ。どうやって僕の魔術を看破した？」

「お前、本当に耳が悪いのか？ オレの写輪眼は魔力を色で見分けると最初にお前の仲間にも話したはずだが」

「そもそも僕の姿も罫も最初から認知されてたという事が」

ここで魔術を解いたのか背丈二メートルはあるつかという赤髪の男が姿を露にしてきた。

こいつは知ってる……確か最初に上条が戦った敵でステイルとかいう奴だったか？ 上条から派手に殴り飛ばされたあの姿は印象に残っている。

「そっという事だ。それで、これからどうするんだお前」

「なら、質問をさせてもらおうか。どうして君は神裂に襲い掛かった？」

「簡単な事だ。オレの術を試すのに手頃な相手だったからだ」

あえて口端を歪めながらそう答えてやるとステイルの表情がみるみる憤怒に染まっていく。フン、やっぱりコイツ、キレやすいタイプのような。

「そんなくだらない理由のために僕達の……『あの子』の為の任務を邪魔したというのか……ッ！」

「くだらない？ オレにとっては大事な事だ。自分の主観で物を語るなよクソヤロー」

神裂に攻撃を仕掛けた理由はオレの写輪眼を始めとした『忍術』の性能を確かめるため。

その他に相手の組織に名が知れるとかちょっととした歴史の改変などという事もあるがこちらはおまけだ。なるべく多くのイベントがオレの身に降りかかるためのな。

「き、さま……ッ！」

「フン、お怒りか？ オレに勝負吹っ掛けるのは良いが……既に前は負けているぞ？」

「貴様アアアアッ！！！」

もはや感情のコントロールという概念が消えてしまったように僕は咆哮した。

本来なら色々聞き出さなければならぬ事があるのだろうが、もう限界だ。この男は一万回焼き殺してもまだ全然足りない！！

「灰になれ！ 灰は灰に 塵はぐっ！？」

何だこの身体中を巡る激痛は……ッ！？

「言っただろ。『お前は既に負けている』とな。自分の体を見てみ

たらどうだ？」

「な、に……！？」

言われるがままに自分の体を見た僕は思わず失神しそうになった。自分の体のあちこちを黒い杭のような物が貫いているのが確認できたからだ。しかし、自分の体で精製している魔力が著しく減る反応が無い。

どうなっている？

「安心しろ、痛みはあるかもしれないが実際にお前の体を針山にしたわけではない」

「貴様の、幻を見せ、る魔術という事が……！」

「そういう解釈で問題無い。さて……」

首筋に当たる冷たい感覚。

サスケという男が僕の首筋に刀を当てているという事に気付くのに時間はかからなかった。

「もう術は試した。後もう一つお前達にやってほしい事がある」

「僕達に命令する気か？ 貴様などに僕、が従うと思っている、のか！？」

「プライドと保身を天秤にかけるか。無駄な死を迎えたいなら今ここで『殺してくれ』と叫べ」

「無駄な死……！？」

ふざけるな。僕が無駄な死など迎えるわけがない。

何故なら。

「ずっと前に……誓ったはずだろ。『僕はあの子の為に生きて死ぬ』って……ッ！」

そのためなら誰でも殺すし、いくらでも壊す！

「オオオオオオオオオオオッ！！！！」

フン、身体中の魔力をあえて乱してオレの瞳術から逃れようとする

るとはな。本能で悟ったのかどうかは知らないが。
まだ甘い。

どんな小さな炎でも良い。あの男の衣服の一部を発火させるだけの火力があればいい！

そう考えてとにかく魔力を体全体を巡らせようとした時だった。僕の体を貫いていた杭……いや、幻が一本消えたのだ。

これは……なるほどそういう事か。今さっき僕は魔術を行使する為に魔力を巡らせた。それも、下手すれば魔力が逆流して自滅しかねない勢いで。

これから察するに。

「分かったぞ。貴様の魔術の打開方法が……！ それは身体中の魔力をあえて乱す事だ！」

僕の読み通り、体の杭が一本ずつだが確実に消えていく。

そして、残り一本という所まで来た時に僕の胸元に違和感が発生した。それはもぞもぞと気持ちの悪い感触で動き、着ていた神父服を勝手に開いていく。

何があるのか見てはいけないと思った。

だが、何故か独りでに瞳が動いてしまう。そこにあったのは

「すている。何で一年前、私を助けてくれなかったの……」

「ッ」

『あの子』 インデックスの顔が、頭だけで此方を下から覗き込んでいた。

それも一生の怨敵を見るような恨みの籠った瞳で。

「すている、」

もう、やめてくれ。頼むやめてくれ！！

ステイルの様子がいよいよ変わり出したな。血の気が引いて顔が脂汗だらけになってやがる。

今頃奴は絶対に見たくないものと聞きたくないものを体感しているだろうな。

「……………れ」

「ああ？」

「……………めてくれ。やめてくれ、やめてくれ！ やめてくれッ！！」

「ようやく降参か。なら、例の頼み事をいうぞ。承諾すればこれからお前達の行動には干渉しないとこちらも誓ってやる」

フン、まあコイツはオレの瞳術初対面にしては頑張った方だな。

が、万華鏡写輪眼を使うまでは無かったか。

さて、二つ目の目的をさっさと果たすか。

「オレの名をお前達の組織のリーダーに伝える。そしてオレがソイツに会いたがっているという事もな」

術を解くとステイルは力なく床に倒れ伏せた。

オレは神裂とステイルが戦闘不能になった事を確認して危険が無い事を確信し、瞳術が無ければ真っ二つに折られていたであろう草薙の剣を鞘に戻した。

さて、ステイルはともかく神裂はどうするかな。見殺しにするのも気分が優れないし、これからまた用件が出来る可能性もあるから応急措置くらいはしておくか。

上条は……………まあ、放っておいても良いか。どうせ担任が助けに来

る事だしな。

ステイルの意地（後書き）

主人公が外道に見えますね；

次回はちよつと時を遡ります。

閲覧、お気に入り、評価……超感謝です！！

ちょっと前の話をしようか

時はうちはサスケと神裂達が戦った日を二ヶ月程遡る

とりあえず自分の住所と所属高校は判明した俺はフローリングの床の上に寝転がっている。

じつくり物事を考えるにはこの状態が一番良いと思ってるからだ。

「ちよいと良いですか？」

「あー？」

ベランダの方からすきま風が入っている。鍵はかけていたはずなのに。

「……お前かメフィスト。ろくな情報を与えずに俺の前から消えやがって」

「それはすみませんでした。今、暇ですか？」

「考え事をしていたんだが……まあいい、話せ」

声で奴だと判断したが、一応ベランダも見ておくか……姿は見えないな。

「実はまた不足の事態がおこりましたね。それについての説明を」

「ミスばかりだなお前」

「事故で死んだ貴方には言われたくない台詞ですね。で、結論から言わせてもらいますと貴方と似た境遇で転生した人達と貴方が殺し合いをしなくてはいけなくなりました」

殺し合い、か。そこまで驚く事ではないな。どこの世界でも殺し殺されは覚悟していたからな。

驚くべき要素は俺と『似た境遇』の転生者がいるって事だな。

「転生者……か。俺と同じくNARUTOのキャラとしてこの世界に転生した輩って事か？」

「詳しくは私も把握してませんが、人数は貴方含め三人。能力などはNARUTOのもので確定してますが容姿までは分かりませんね」「見付けるのが面倒だな……いや、今の俺の容姿なら逆に相手からやってくるか？」

これは相手に狙われやすいつて事にもなるが……問題無い。これから力を付けて返り討ちにしてやればいいだけの話だ。

「何にせよ気を付けてください。貴方がやられてしまうと私は敗北したという事で鬨り殺しなぶにされてしまうルールらしいですから。全く厄介なゲームに参加させられましたよ」

「なら当然俺が有利になるよう協力するんだよな？」

「協力はしますが貴方に干渉しすぎても敗北扱いらしいので」

「よく分からないな。どの程度が干渉のし過ぎなんだよ」

「まー、私が戦闘に加わるのは余裕でアウトとして……ちよいとした道標を提示したり物資を送るくらいなら大丈夫かと」

「あんまり役に立ちそうにない協力だな」

溜め息を吐き、とりあえず立ち上がった。俺の中での最優先事項を発見した以上、こんな所で考え事のためにゴロゴロしているのは時間が非常に勿体無い。

「おや、お出掛けですか？」

「まあな。一ヶ月以上はここには戻らないが」

「そんなに長い期間何をしにいくのですか？」

「俺の最優先事項はさつき決まった。修行だよ、忍術の修行。今の俺はいつ殺されてもおかしくねえ状況だからな」

「成る程。そういう事ですか」

と、ベランダの隙間から布に包まれた細長い物が投げ込まれた。手に取って確かめてみると長さは一メートル前後程だろうか。

「これは何だ」

「私からの餞別です。『草薙の剣』ですよ」

「ハン、ちよいとした物資とか言ってたわりには随分な業物をくれるんだな」

「最初で最後の物資だと思ってください。……それでは、御武運を」
「ああ」

……さて、まずは豪火球の術でも練習するか。

先程の話から一ヶ月後。

数分前までは平和だったとあるローマ正教の協会は見るも無残な状態になっていた。

協会の外観はボロボロになるまで破壊尽くされていたが何より悲惨なのはその内部だった。

あちこちに転がる惨殺死体の数々。人間の原型も留めてない物も少なくない。

「きゃはっ、凄いなあ」

その赤に彩られた場所に一人の少年が立ち尽くしている。黒いフードを被っていて顔はよく見えないが、波紋模様の不気味な瞳が彼の特徴を表している。

「凄いや輪廻眼の力は」

転がっている死体達は元一般人ではない。全員、プロの魔術師だった。それらをこの第一変声期も迎えていないような高い声の小柄な少年が一人で虐殺したのだ。

「さてと、あまり傷付いていない死体六人を回収してさっさと帰ろうかな。お腹空いたし」

少年は不気味に口元を歪ませた。

その体には返り血一つすらついていない。

時は進み七月二十七日。

一人の少女がビルの屋上から見える景色をつまらなさそうに眺めていた。

「三人目の転生者……案外早く見付けられたぞ」

「ほう、幸先が良いじゃないの。どうやって転生者だと見分けをつけた？」

「簡単だ。奴がうちはサスケそのものの容姿をしていたからだ……馬鹿な奴だ」

少女は姿の見えない誰かとの会話を続ける。

「ふ、『この体』で動いていた甲斐があったというものだ。警戒心ゼロの奴から住所などの個人情報を見付けるのは実に簡単だったな」「成る程……本命の体を使ってなかったのはそれが理由か」

「ああ、他人の体を一時的に乗っ取って情報を仕入れるというのがこの体を使っている主な理由だ。それに、本命の体は代用が効かないからな。あれを動かすのは本格的な戦いの時だけだ」

「……？ 住所が割れた転生者を殺しに行かないのか？」

「あいにく俺は自分の力をあまり扱いきれていない。それに対して奴は聖人を倒すくらいに成長している。二ヶ月程の短期間で」

「……それは転生者としての才能は向こうが上回っている可能性が高いな」

転生者の才能？ と少女は小首を傾げたが、それ以上気にする素振りは見せなかった。

「まあ時間はある。動かせる駒も手に入れた事だしな」
踵を返し、少女は歩き出す。

余裕を含んだ薄い笑みを張り付けたまま。

「時期が来れば転生者は皆殺しだ。その後、俺の力でこの世界を掌握してやる。」

この『うちはマダラ』の力でな」

ちょっと前の話をしようか（後書き）

短くてすみません；

次回からは妹達編に入ります！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3901x/>

とある魔術の血継限界《ブラッディ・リミット》

2011年10月19日03時16分発行